

世論調査雑記 (その2)

フィールド・ワークについて

総理府 広報室 上 本 仁 士

(一) フィールド・ワークときいて、すぐにその意味を理解する人は多くないと思います。私もその意味をすぐに了解し兼ねた1人でした。世論調査の仕事に取り組むようになってみれば、今や何でもない言葉として、ごく当然のこのように使い慣らしている自分に気がついて、苦笑することが一再ならずでした。

フィールド・ワークとは、英語の Field work をそのまま日本語として使っているに過ぎませんが、辞書の直訳によれば、「野外作業、実地踏査(測量、採集など)」となっています。世論調査においてフィールド・ワークといえ、狭くは調査員が個々の対象者を訪問して、質問票により面接聴取する作業を指しているわけですが、英語本来の意味から広く解釈すれば、調査員が現場活動として関与する作業であれば、標本の抽出(対象者名簿の作成)も、予備調査(プリテスト)の実施も含めてよいといえます。そこで、本稿は、本来の世論調査「雑記」の特色を生かして、このフィールド・ワークの一、二の側面について、私の断片的な感想を書き綴ってみたいと思います。日常フィールド・ワークを担当される調査機関の方々の問題認識と必ずしも合致しないかも知れませんが、初心者の一つの印象として、参考にされるならば幸いです。

(二) まず、末梢的なことかも知れませんが、フィールド・ワークという用語について苦言を提したいと思います。正確には、用語自体ではなく、フィールド・ワークという言葉を使うことについての心構えの問題です。

どこの世界にも、必要に迫られて、その世界特有の用語が生れてくることは否定できません。その世界では、その方が便利だということでしょうが、自己の仕事にかまけて、一方で、その仕事が社会全体の利益にとって果している役割について無関心であってはなりません。自己の携わる仕事に対する研鑽が大切であると同時に、「樹をみて森をみず」と戒められるように、例えば世論調査の仕事が社会全体の営みの中で占めている位置を見失わないように注意を払っておくこともそれにもまして大切です。

私が、フィールド・ワークということばに最初のあいだ抵抗を感じた事情というのは、いわば、そのことばが、森の中の僅かな樹にのみ視野を限られた悪しき意味でのスペシャリスト(専門家)の狭量さの臭いを感じたからに他なりません。同業者の仲間うちで使うことは、必要に迫られてやむをえないことでもありますが、それをし、外部の世界の人々に向かって、得意然と使うようなことがあるとすれば、それは、すでに世論調査の仕事をして、社会との紐帯に対して背を向けさせる1つの徴候といえないこ

ともありません。何故なら、社会のどのような専門分野でも、社会における分業としてその位置を与えられているのである限り、その専門分野の成果は、たえず社会全体の利益として還元されなければならないのですから。

消費者物価指数のことを我々仕事仲間の間で英語の頭文字をとってCPI (Consumer's Price Index) などと呼びならわすのも総理府ならではのご愛敬ものですが、要は、自分の仕事の存在意義について、社会全体の中での鳥瞰図をたえず考慮しておく心掛の必要性を、たまたま、世論調査の仕事についても、フィールド・ワークということばにかこつけて、再確認しておきたかったのです。

(三) さて、本題ですが、最近、財団法人日本世論調査協会の研究活動委員会において、世論調査におけるフィールド・ワークを、それに従事する調査員の実態も含めて、改めて「実査のあり方」として検討しようとする意向が表明されました(日本世論調査協会報第36号)。私は、その研究活動委員会においてなされた問題提起に刺激されて、今まで少しづつ醸成されていた実査活動(フィールド・ワーク)に対する私の認識を、この際、少しでもまとめておきたいと考えました。

協会の問題提起は、「調査の原点 "実査のあり方" の再検討」と題する次の8項目でした。

1. 企画と実査の跋行性
2. サンプル・フレームとサンプリング
— サンプリング作業とその結果 —
3. 調査員募集と調査員の質
4. 面接場面の諸条件
5. プリテストと実査のズレ
6. 質問紙の設計と実査の状況

7. 点検、回収の重要性の認識

8. コーディングにおける問題点

これら8項目の内容のあらまは、紙面の都合上割愛させていただきます(協会報36号39頁参照)、それらを一貫して流れている問題意識は、昨今の調査員気質ないし実査の現状に対する調査機関のもつ危機感でした。曰く「仕入れた材料がよくないのに(質問文の不出来、実査の過程における諸々の過誤)、それをどのように立派に料理しようとも(どのように高度な分析技術を駆使しようとも)、出来上った料理は美味であるはずがない」。この際、調査の原点である実査(フィールド・ワーク)のあり方を見直そうというものでした。

(四) 一般に、世論調査は、それを時間的な経過において眺めると、調査の企画、予備調査、標本抽出、調査実施(フィールド・ワーク)、回収、点検、整理、集計、分析、報告書作成などという手続きに分けることが出来ます。ですから、調査の現場活動であるフィールド・ワークは、調査の原点であるか否かは、ともかくとして、世論調査の完成には、欠かせない基本的な手続に違いありません。しかし、それは、いわば、世論調査生産の一つの工程であり、この工程が十分善良な状態で管理されなければ、調査の結果に悪影響を及ぼすという意味で注意を怠ってはならないものですが、十分注意を払ったから、調査の成果が企画段階での期待以上に達成されるというものではありません。つまり、フィールド・ワークの改善がなしうる貢献としては、調査がより悪くならないという方向における努力であり、より良くするための努力は、本質的に調査企画、就中、その中心である質問文の作成の良否に、大部分かかっているという他あ

りません。前記世論調査協会の問題提起にしたところが、そのあげている問題点の逐一について点検すれば、多くの場合、結局は、調査企画の質に左右されるものであることが納得できると考えられるのです。

このように主張したからといって、私が、調査の実際活動を貶しめたことにはならないと思います。ただ、しかし、それでは、フィールド・ワークについて論ずべき点は何であろうかという疑問に改めて当面するように思います。

(五) ここで、私は、世論調査の仕事に携わるようになって、初めて、いわゆる「飛びこみ」を経験したときの感慨を書き留めて、以下の展開の足がかりにしたいと思います。

「飛びこみ」とは、質問票をもって、任意の一般家庭に「飛びこむ」ところから俗称しているものですが、質問の作成者にとっては、自ら体験する予備調査ともいえるでしょう。さて、実際問題として、世論調査の仕事に携って、こうして、フィールド・ワークの真似ごとをしてみると、調査票にある質問文を読み上げた際に、対象者に素直に理解でき、従ってスムーズに回答が得られるか否かの吟味をする予備調査本来の作業を行う以前に、私はまず、従来の仕事とは異例の、このような現場活動に対する一種の心理的抵抗を克服するのに一苦労しなければなりません。それは、大部分、私自身の個人的事情に由来しているものではありませんが、一面、フィールド・ワークの基本問題を含む事情でもあります。

ともかくも、私は、勇を鼓して「飛びこみ」を始めました。1年前の某県庁所在都市の外れでしたが、型通り(?)まずもって、玄関口で「ごめん下さい」から始めたものです(そうで

す。この「型」がフィールド・ワークでは、まさに問題になるところでしょう。初対面の対象者に面接調査を申し入れる場合の切り出し方の「型」ですが)。このような場面では、結局、調査員一人一人の個性が端的に表われるでしょう。ですから、実査(フィールド・ワーク)の要領について、調査員が心得るべき事項の一つには、例えば、精々のところ被面接者(対象者)と面接者(調査員)との間に「感情的な親和感」(「世論調査 — 設計と技法 —」103頁)を与える努力をすべきであるというような一般的注意を与えるに止まらざるをえない事項が掲げられるのです。

さて、私は、この時、60歳年輩の一人暮らしとおぼしい孤独な婦人に行き当りました。その婦人はそもそも、その時の調査主題に対して、ほとんど関心らしいものを示しませんでしたし、従って、当然、個々の質問事項についても、ほとんど明解な反応がみられませんでした。当時の調査票も不出来のきらいはありましたが、両両あいまって、その時、私がとらえられた実査活動ひいては世論調査自体に対する索然とした気持は、救いがたいものでした。

(六) 例えば私のこのような感慨は、初心者の過敏とか、調査員個人(私)レベルの情緒的な問題にすぎないとして放置されてはならないと思います。私には、「初心忘るべからず」で、ここにも世論調査の存在理由を問い直す問題意識の端緒が用意されているように思います。それでは、フィールド・ワークに関して問題とされるのは、例えば、このように人と面接することに伴う様々な心理的負担をいかに減少させるかという類いのテーマでしょうか。私は、こうして、自身にも反語的な問いかけをして、そ

れ以外にもあるかも知れないテーマを探してみました。

それが、つまりは、「フィールド・ワークについて論ずべき事項は何であろうか」という、依然として残っている疑問に一つの解答を与えるであろうと考えたからです。フィールド・ワークについて論ずべき事項を明らかにすることは、換言すれば、フィールド・ワークの世論調査全体の作業工程における位置づけを明らかにすることでもあります。

そこで、世論調査に関する手引書をひもとけば、フィールド・ワークに関しては、「調査員の心得」とか「調査員の資格」などとして、例えば、次のように説かれています。

面接質問法

面接は理論ではなくして技術である。調査員は回答者及び情況に絶えず適応することが必要である。質問者は回答者の誇りを傷つけるような言葉をつかってはいけぬ。調査項目の票は、原則としては見せない。見せて相手に書かせているような場合には、前の方の記憶が作用を起して、それが刺激となって後の回答を条件づけることになる。その他質問を時間的に長く続けてはいけぬ。大体アメリカでは15分というのが面接の限定である。それは実験的・心理的基礎から出て来ている。またアメリカでは直接面接のほか電話面接という電話で調査するのが非常に流行しているが、電話に対しては5分以内、郵便の質問項目は大体5～10分くらいの限界がもっとも正確な答をうるための一応の標準である。

面接者の心得 1) 回答者に面接する前に2～3の人につき調査を行うことが必要である。指令書に従って面接を完了しうるかどうかをテストし、もし欠点があれば監督者に申し出る。2) 調査員は注意深く、指令に従うこと。3) 回答者への訪問は適当な時間を選ぶこと。4) 得た標本は正確

に割当と一致していなければならない。5) 質問は質問票の順序に従い、逐次的に質ねること。

6) 調査員は回答者により印象を与えること。

7) 質問応待の態度は中立でなければならない。

8) 相手の回答が不明瞭なときは質問を繰返して明かにする。9) 調査員は綺麗に読み易いように書かなければならない。10) 適切な回答のみを受取り、記録する。回答は真実であるもののみが価値があるのであり、自由回答法の場合には回答者の使った言葉通りを記録する。11) 要求されたすべての項目を正確に忠実に記録する。12) 問題によっては調査員の種類は変える必要がある。例えば育児している母の態度の調査には同年輩の女性の調査員があたるなど。

調査員の資格 1) 主題に対して相手方に興味を起させ、自由に話ができる能力のあること、即ち外向性の人が適している。2) 普通以上の教育を有し、相手方に不愉快を与えないだけの外観と振舞をなし得ること。3) 調査に経験のあること。4) すべての階級の人にたやすく接し— 明るい性格— 自由な会話から必要な回答を引出し得る能力のあること。5) 旺盛な研究心と好奇心に富み、内面までも見透し得る能力のあること。6) 正確に記録する能力、偏見や主観等を交えずに本心を知る能力のあること。7) 正確な観察能力と細部に及ぶ良心的考慮が要求される。8) 他人の態度、意見に親和的な関心を有すること。9) 絶対的な正確さと信頼性を有すること(さぎの調査者を避けること)。10) 記憶力の強いこと。11) 原因・結果の関係を追及する能力のあること。12) 独断的でないこと。13) 批判的精神— 自己批判を含むこと。

統計学辞典 745頁、746頁
昭和27年東洋経済新報社

(七) 私が指摘したいのは、これらの心得や資格は、世論調査の主題がどのようなものであるかに拘わりなく、一般的に調査実施の段階で要求され

る事項であり、世論調査の生命である調査主題自体の追求に関わる事項ではない点です。換言すれば、どのような調査主題についても、調査員に一律に要求される事項であり、その限りでは、その時どきの調査主題とは独立した位置を占めている点です。

わずかに、前記「面接者の心得」の12項や、「調査員の資格」の1項、5項、11項に、調査主題の追求に関連のある注意がありますが、これとて、強いものではありません。

こうしてみると、前項で再提起した疑問、つまり、「フィールド・ワークにおいて論ずべき事項」とは、まさに、そこで例示したような「人に面接することに伴う様々な心理的負担をいかに減ずるかという“類い”の問題」であり、面接における切り出し方を一般的抽象的規範の形で示す「型」の問題であるわけで、フィールド・ワークに関しては、この種の問題をあげらうことが論点になりそうです。

つまり、フィールド・ワークは、予め計画された枠の中で行われ、いわば、世論調査という舞台の裏方ともいべき存在として位置づけられると考えられます。

なお、現実問題としては、「調査員の資格」に謳うような条件を満足する調査員というよりも、調査員としての欠格者をいかに排除するかという一段悲観的な状況において、調査員を選定せざるを得ない現状を日本放送協会の児島和人氏が日本世論調査協会会報第36号で指摘されているところですが、世論調査にとっては、看過することの出来ない問題だと思われます。

(八) 私のつたない「飛びこみ」の経験はさておいても、一般的に言って、調査員が、全く未知の家庭を訪問して対象者の回答を求めて歩く行為

は、何ほどの気おくれが伴うものでしょう。私は、フィールド・ワークの特徴について、今まで触れたような、ある程度自明のことを確認したかったわけではありません。むしろ、こうして、フィールド・ワークを担当する調査員の仕事の一端を理解し得た機会に、フィールド・ワークにも、1つの激励を与える必要を強調したかったのです。

フィールド・ワークの悲哀とよろこびは、やはり、生産の最終工程を終えた生産品そのものの価値に全幅的に依存せざるを得ません。私はフィールド・ワークについて語るとすれば、それは理論というよりも、多く、実践に基づく経験論だろうと考えます。フィールド・ワークが世論調査全体の作業からみれば、一つの工程であることは、前述のとおりですが、同じく前述のとおり、それは華やかな舞台の裏方ともいべき存在です。私が感じたところを卒直に述べるならば、少なくとも、フィールド・ワークの場では、世論調査の全体的な手応えを感ずることは出来ないという失意でした。

世論調査が世論調査本来の意義を発揮する上で必要なポテンシャル・エネルギー(潜在力)をもちうるか否かは、大部分が、調査の企画にかかっていると考えます。私は、この場合の「企画」に、かなり広い意味をもたせたいと思います。例えば、主題の選択は、勿論のこと、調査結果の分析についても、予め一定の狙いや価値判断を目論むとか、一定の評価を引き出すための集計方法を工夫することとか、各質問を通じて回答カテゴリーに一貫した尺度値を与えておく工夫などを含みますし、標本設計段階や実査段階においても、調査主題に応じた工夫をこらすことも含まれます。場合によっては、回収点検段階での指示事項までも含めた意味あ

いにおいて使いたいのです。

私は、このような意味での世論調査の企画ないしは、調査主題に対する取り組みの責任を、ここでも考えざるをえません。世論調査が人々の意識状況の把握を通じて施策決定に何らかの参考になるという一般論程度ではなく、もっと一步踏みこんで、その時々の調査主題に関して、調査員自身が、その質問内容に興味をもてるような質問、調査員が対象者1人1人の反応を心待ちにするほど魅きこまれるような問いかけ……そのような質問票を用意することが、実査活動を支える力になると考えます。

(九) 話がとりとめもなくなりましたが最後に一つ、「飛びこみ」で私の簡単におかした過ちを紹介いたします。私の場合にも、調査票の質問文を正確に読み上げることがまどろこしくなって、その意味内容に沿って、その場で自分が勝手に創作した簡単な文句によって質問することがありました。質問文の言葉使い(ワーディング)の端

端をあれ程神経質に追求する割合には、このように実査活動の場で、手もなく言葉使いを変えてしまうことへの根強い誘惑を、フィールド・ワークの真似ごとをした私自身が味わったわけです。こうしてみると、調査員の指導を担当される調査機関の方々の苦労もわかるような気がします。

こうして、私は、フィールド・ワークについて、むしろその役割の限界を示す方向で感想を述べて来ました。要するに、世論調査は、その調査主題の追求が生命であり、それとの緊張関係を定型的な形で要求されることの少ないフィールド・ワークには、論点の次元に自から限界があると考えたわけです。しかし、調査員の志気沮丧は、私の意図するところではありません。私の感想が善意に理解されることを、最後に切に希望して、冗長で、竜頭蛇尾の感想をこの辺りで終りにします。

